

秩父地方に伝わる妙見

—— その変遷と現状 ——

小 村 純 江

KOMURA Sumie

神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科 博士後期課程

【要旨】 妙見信仰は北極星や北斗七星を神格化した信仰である。古代、中近東の遊牧民や漁民に信仰された北極星や北斗七星への信仰は、やがて中国に伝わり天文道や道教と混じり合い仏教に取り入れられて妙見菩薩への信仰となり、中国、朝鮮からの渡来人により日本に伝わったといわれる。

秩父地方も古くから妙見信仰が伝わった地域であり、その信仰体系の中には現在「屋敷神的要素」「氏神的要素」「生産神的要素」の三つの要素を認めることができる。

本稿で秩父地方を事例とし、この三つの要素を基に妙見が地域に果たす役割と地域の人々の妙見への思いについて調査したところ、次のような傾向を認めることができた。

一つ目の「屋敷神的要素」については、秩父市中宮地にある関根家の敷地内に祀られている「妙見塚」と周辺地域に伝わる妙見を調査した。その結果、「妙見塚」と宮地地域に伝わる妙見は、関根家の屋敷神的存在であるとともに地域の屋敷神的存在として代々守り伝えられていた。二つ目の「氏神的要素」については、秩父神社を災いから守るために祀られたと伝えられる「秩父七妙見」の一つである身形神社を調査したところ、妙見に対する地域の人々の意識は以前と変わらず、今後とも妙見を守り伝えていく心意気を持っていた。三つ目の「生産神的要素」については、妙見の祭祀である秩父神社の「御田植際」と「秩父夜祭」を調査した。この二つの祭祀に係る人々は、現在、秩父市内で農業や商業・加工業等、主に生産業に携わっており、妙見への祈りは生産神への祈りとなっている。また、この三つの要素は互いに影響し合う一面を持っていた。

以上の調査を踏まえ、現在の秩父地方の妙見を概観すると次の二つの様相が認められた。一つは「古態の持続性を維持する」妙見であり、「屋敷神的要素」を持つ妙見と「氏神的要素」を持つ妙見の中に伝えられていた。もう一つは妙見の祭祀を媒介とし「地域振興の育成」に貢献する妙見であり、「生産神的要素」を持つ妙見の祭祀の中に伝えられていた。

Myoken Passed Down in the Chichibu Area:

—— Its Changes and Current Situation ——

Abstract : Myoken worship is the deification of the North Star and Big Dipper, originally practiced by nomads and fishermen in the Middle East during ancient times. It later spread into China, blended with astrology and Daoism, influenced Buddhism and led to the veneration of Myoken Daibosatsu, or the Great Bodhisattva of the Pole Star. Chinese and Korean immigrants then introduced this cult to Japan.

Myoken worship is deeply rooted in the Chichibu area where the religious practice now involves three major figures, namely, the deities of estate, clan and production. For this paper, the

Chichibu area was closely examined to explore the role of Myoken worship and the views of local people in relation to these three figures of worship. The following are the findings of this study.

To gain insight into the estate deity, the Myoken Mound enshrined within the premises of the Sekine Family in Nakamiyaji, Chichibu City, and Myoken worship in the surrounding areas were studied. There the deified North Star and Big Dipper are venerated as the estate deity for not only the Sekine Family but also local people, and veneration of the deity has been passed down from generation to generation. Regarding the clan deity, the author investigated the Mikata Shrine, one of the Chichibu Seven Shrines of Myoken built to protect the Chichibu Shrine from misfortune. Local people's views on Myoken have not changed, and worship is willingly practiced and handed down to the next generation. The Otaue Rice Planting Festival and the Chichibu Night Festival hosted by the Chichibu Shrine were also investigated to understand the production deity. People involved in these two festivals work in sectors in Chichibu City involving agriculture, processing, commerce and manufacturing in particular. For them, Myoken worship means praying to the production deity. These three aspects are intertwined with one another.

Two major points were revealed by examining Myoken worship today in the Chichibu area based on these studies. First, the original form of the religion has been maintained, and we can conclude that Myoken is an amalgamation of the estate and clan deities. Second, Myoken rituals contribute to local development with the aspect of the production deity.

はじめに

妙見信仰は北極星や北斗七星を神格化した信仰である。古代、中近東の遊牧民や漁民に信仰された北極星や北斗七星への信仰は、やがて中国に伝わり天文道や道教と混じり合い仏教に取り入れられて妙見菩薩への信仰となり、中国、朝鮮からの渡来人により日本に伝わったといわれる。日本の妙見信仰は妙見菩薩に祈る信仰であるが、同一の仏神でありながら形を変え時代に沿った信仰形態を展開してきたといえる。そして時代の変遷を経て信仰の形態が変化していくとともに、日本各地に伝えられていった。

秩父地方も古くから妙見信仰が伝わった地域であり、その信仰体系の中には、現在、次の三つの要素を認めることができる。

その一つは「妙見塚」を敷地内に祀る秩父市宮地の関根家とその地域に伝わる「屋敷神⁽¹⁾的要素」である。二つ目は地域の祭神、すなわち地主神⁽²⁾的な一面を持つ「氏神⁽²⁾的要素」である。それは秩父地方の妙見の中心である秩父神社（秩父市番場町）を災いから守るために祀られたという「秩父七妙見」にもみることができる。三つ目は「生産神⁽³⁾的要素」である。妙見の祭祀等に係る人々は、現在、秩父市内で農業や商業、加工業等主に生産業に携わっている人々であり、生活への身近な願いを妙見へ託し、その願いは秩父神社の「御田植祭」や、かつて「お蚕祭り」といわれた「秩父夜祭」という形で伝えられている。「秩父夜祭」を華やかに盛り上げている付祭りは、近代の秩父において織物産業をバックアップし、産業都市としての発展に大きく貢献する役目を果たしてきた。江戸幕府による屋台行事の禁止など、社会情勢の影響を受けながらも都市祭礼として大きく発展してきている。

本稿の目的は、現在、様々な場所や生活・習慣、行事・祭礼の中に妙見の存在を認めることができ

る秩父地方を事例とし、前述した三つの要素を持つ妙見が地域に果たす役割と地域の人々の妙見への思いについて探ることである。

研究方法は、2014年から2016年にかけて行った秩父市中宮地の関根家とその地域に伝わる妙見、秩父地方に伝わる「秩父七妙見」、秩父神社の祭礼「御田植祭」と「秩父夜祭」の三つの調査を基に、秩父地方に伝わる妙見の現状と地域の人々の妙見に対する意識を明らかにしていく方法をとる。

本稿では、Ⅰで秩父地方に伝わる妙見に係る諸問題を取り上げ、Ⅱで調査地の概要を述べる。Ⅲでは「秩父地方の信仰体系にみる妙見信仰との関わり」というテーマのもと、宮地地域に伝わる妙見の現況、「秩父七妙見」の様相、「御田植祭」と「秩父夜祭」の経緯を取り上げる。以上を踏まえ、Ⅳで秩父地方に現代も伝わる妙見について考察する。

Ⅰ 秩父地方に伝わる妙見に係る諸問題

(1) 研究史——秩父地方の妙見を中心として

「御田植祭」と「秩父夜祭」については多くの先行研究にその内容が詳しく述べられている。特に「秩父夜祭」の成り立ちや運営、屋台（祭礼のときなどに、飾り物をしたり、踊り手や囃子方をのせたりして練り歩く小屋形の台）については、中村孚美（1972）や浅賀ひろみ（2009）等数多くの先行研究がなされている。本稿では、祭祀や行事の概要ではなく、現在、秩父地方に伝わる妙見に視点を置いた先行研究について述べていく。

千嶋壽（1981：57）は、祭りや神々の体系が社会的構造を反映するものとして認められるならば、その頂点に立つ秩父神社やその祭神は、当然地域社会の統一の象徴であり、必ず政治的・社会的発展段階を経ることによって成り立ったものだと考えなければならないと述べた。その祭神とは、妙見神を指しており、秩父神社で行う「秩父夜祭」や「御田植祭」などの祭祀の中に認められる妙見についてあらゆる角度から見解を述べ、秩父地方における妙見信仰について深く考察している。現在、天之御中主神（明治時代より前は妙見）を祭神の一つとする秩父神社の宮司である藺田稔（2005）は、秩父に妙見が伝えられ現在に至るまでの過程と、秩父における妙見の奥深い存在感を追求している。

現在の秩父地方を民俗学的な視点で捉えた栃原嗣雄（2005）は、秩父地方一帯の日常の伝統的な行事、祭礼、信仰、芸能、民具等についての詳細な調査内容から、秩父地方の人々が妙見を育んできた環境を中心に述べているが、妙見信仰と秩父地方との関わりを論じたものではない。

外秩父地方に伝わる妙見について克明な実地調査に基づく見解を述べた若松良一（2011）は、「秩父七妙見」についても言及しているが、文書等による歴史的な視点からの分析を中心とした見解を述べている。

(2) 問題の所在

以上のように秩父地方における妙見の研究は、現在、天之御中主神（明治時代より前は妙見）を祭神の一つとして祀る秩父神社を基点とし祭祀からたどっていくもの、妙見を育んできた秩父の様相を述べたもの、そして歴史的な視点から妙見を分析したものであった。それらは現在の秩父地方の妙見を民俗学的な視点で捉えたものとは言い難い。

筆者が調査した秩父地方の秩父市宮地、東秩父村は、現在も祭祀や日常生活の中に妙見が認められる地域であり、妙見が伝えられた過程と現状を地域の人々の視点を通して知ることができると考える。そこで、この調査地の事例を基に、現在どのような形で妙見が秩父地方に伝えられているのか、地域の人々は妙見をどのように思っているのかを本稿の問題の所在としたい。

したがって、本稿では秩父地方に現在も伝わる妙見について、民俗学の視点からその特徴を明らかにし、妙見が地域に果たす役割と地域の人々の妙見への思いについて探ることを課題とし、そのための方法として、秩父地方に伝わる妙見の現状と地域の人々の妙見に対する意識を明らかにしていく。

Ⅱ 調査地の概要

(1) 秩父地方

本稿では、秩父市と秩父郡（横瀬町・皆野町・長瀬町・小鹿野町・東秩父村）からなる地域（資料3）を秩父地方として述べていく。秩父地方は、埼玉県、東京都を流れ東京湾に注ぐ荒川の上流部で埼玉県の西部に位置し、東京都、山梨県、長野県、群馬県に接しており、武甲山、三峰山、両神山、城峰山などの秩父山地に囲まれている自然豊かな地方である。

秩父地方の南端には、秩父市と横瀬町にまたがる標高 1,304 メートルの武甲山がそびえている。武甲山は、過去に「嶽（山）、知知父嶽、祖父ヶ岳、武光山、妙見山」（千嶋 1981：112）と山名を変えてきたが、現在は奥武蔵・秩父の象徴となっている。

秩父地方は、古代、708 年に和銅が朝廷へ献上され「和銅」と改元されるなど銅の産地として栄え、また名馬の産地でもあった。平安時代は、桓武平氏流の平良文を祖とする坂東八平氏・秩父氏の根拠地となり、武蔵国周辺で有力武士団を率いた。

かつて秩父地方は、この武甲山から採掘された石灰を加工するセメント産業と秩父銘仙を主力とした絹織物産業を主要な産業として発展してきた。そして絹織物産業の発展とともに江戸と秩父を結ぶ秩父往還は絹商人の往来で賑わい、秩父地方に多くの江戸文化が流入した。絹織物産業は時代の流れとともに衰退していったが、昔からの伝統行事・慣習は、時代を経た今も変わることなく残されており、秩父地方は民俗芸能の宝庫であるといわれている。その一つに歌舞伎があげられる。小鹿野歌舞伎をはじめ各地域でたくさんの地芝居が行われており、「秩父夜祭」では「屋台芝居」（歌舞伎）が屋台の上で上演され、祭りを華やかに彩っている。

(2) 秩父地方と妙見

妙見信仰が、秩父に最初に伝わった時期は明らかではないが『埼玉の神社 入間・北埼玉・秩父』の「秩父神社」に「天慶年間〔938～947〕、平将門と……（中略）……平国香が戦った上野国染谷川の合戦で、国香に加勢した平良文は、同国群馬郡花園村に鎮まる妙見菩薩の加護を得て、将門の軍勢を撃ち破ることができた。以来、良文は妙見菩薩を厚く信仰し、後年、秩父に居を構えた際、花園村から妙見社を勧請した。これが、秩父の妙見社の創建であると、社記や『風土記稿』は伝えている。良文はその後、下総国に居を移したが、その子孫は秩父に土着し秩父平氏と呼ばれる武士団を形成した。また、武蔵七党の丹党の惣領である中村氏も、秩父に土着した」（埼玉県神社庁神社調査団

1986：1226-1227）とあり、妙見菩薩を尊崇する平良文の移動に伴い上野国群馬郡花園村から秩父に流入したものと伝えている。

ここで妙見の伝播について、次の資料に基づき、その経過をみていくと以下のように捉えることができよう（資料1、資料2）。

- A 『新編埼玉県史 通史編2』：『秩父大宮妙見宮縁起』に、四条天皇の嘉禎元年（一二三五）九月の落雷で秩父神社の社殿が焼失したため、妙見宮（旧鎮座地を秩父市内の大野原及び宮地あたりとする伝承がある）を秩父大神の鎮座する柞森〔秩父市番場町〕に合祀し、従来より祭っていた知々夫彦命（秩父大神）は、神宮地司摂社に祭られることになったとある。しかし、これは秩父神社の廃絶を意味するものではなく、氏神祭祀や地主神の祭祀を基層信仰として保持しながら、外界の現世利益的な機能を有する勧請神を受容付加することにより、社名や神格を変容していったというのが実体だろう。（埼玉県 1988：1014）
- B 『秩父大宮妙見宮縁起』：1235年秩父神社社殿が焼失しとあり（園田 2014：7）、その後再建を果たした1320年代ごろ秩父神社に妙見大菩薩が合祀されたと考えられるが、地域で伝えられる伝承や民話、記録などから、1320年より前に秩父神社近辺の宮地周辺では妙見の痕跡が語り継がれていたことが察せられる。
- C 『埼玉の神社 入間・北埼玉・秩父』：〔秩父市大野原（大野原字宮崎）にある愛宕神社について〕当社は、口碑によれば、元来は村の東に位置する字峰沢にある前山の山上に祀られていたが、1619年に字宮崎にある現在の境内へ遷座したという。この話に出てくる前山には、往古、妙見宮（現秩父神社）が祀られていたと伝えられ、妙見宮は、その後、宮崎、柞の森と社地を移していったという。これらの伝説と、秩父神社文書の「嘉禎の火雷後妙見宮を柞森に祭祀されその宮籬の辺りに火神愛宕の神祠を営みける」という記事と合わせて考えると、当社は、落雷による社殿焼失のために遷座した妙見宮の跡地に火防の神として祀られた社で、妙見宮がその土地を移すにしたがって、当社も前山から宮崎に社地を移したと見ることもできるが、いまだ推論の域を出ない。（埼玉県神社庁神社調査団 1986：1196）
- D 『埼玉の神社 入間・北埼玉・秩父』：〔秩父神社について〕当初、妙見社は、秩父神社の北東の宮地（一説には大野原）に鎮座していたが、嘉禎元〔1235〕年に落雷に遭い社殿を焼失したため、翌年、幕府は再建を命じ、柞の森に妙見社を移し、火神である愛宕神を旧地に祀り、後難を防がした。1314年に至ってようやく社殿が落成し、遷宮が行われた。（埼玉県神社庁神社調査団 1986：1227）
- E 『秩父大祭 歴史と信仰と』：来秩した妙見が合祀以前に先祀された土地として宮崎山→オトクボ→宮崎台地へと移動し、やがて秩父神社の母巢の森へ遷座したことは認めないわけにはいかない。（千嶋 1981：174）
- F 宮地町と宮崎町とが接する地点に、曹洞宗の大林山広見寺がある。この寺の山門手前に妙見堂と呼ぶ小堂がある。これは広見寺の南（宮崎台地）にあった妙見宮が秩父神社に合祀されて形を失った時、その名残をとどめるために建てられたものであると伝えている。『広見寺記』（延享四年〈一七四七〉著述）では、寺の境内そのものが妙見を地主神とし、妙見に寺地を譲り受けた、という縁起がある。そのために妙見堂を建立した……と読める。（千嶋 1981：172）

これらの文献資料に記されている地名と現在の所在地、妙見の伝播について整理すると次のとおりである。

妙見と関わりのある所		現在の所在地	妙見との関わり
愛宕神社		秩父市大野原	遷座した妙見宮の跡地に祀られた
愛宕神社		秩父市中宮地	遷座した妙見宮の跡地に祀られた
音窪	= オトクボ	秩父市下宮地	妙見が秩父で2番目に祀られた所
廣見寺		秩父市下宮地	次の二つの伝承がある。「妙見に寺地を譲り受けたので妙見堂を建立した」「妙見宮が秩父神社に合祀されたのでその名残をとどめるために建てられた」
妙見塚		秩父市中宮地	妙見が「妙見七ツ井戸」を渡って行く途中で10年間滞在した所
妙見堂		秩父市下宮地	妙見宮が秩父神社に合祀されたので、名残をとどめるために建てられたと伝わる
宮崎台地	= 宮地	秩父市 (上・中・下) 宮地	妙見が秩父で3番目に祀られた所
宮崎山の丘陵地	= 字峰沢の前山	秩父市大野原	妙見が秩父で最初に祀られた所

- ① 10世紀中頃、平良文が上野国群馬郡花園村から妙見を勧請した。良文は下総国に居を移したが、子孫は土着し武士団「秩父平氏」を形成、武神として妙見菩薩を篤く信仰した。
- ② 妙見宮は最初、宮崎山の丘陵地（字峰沢の前山、秩父市大野原）に祀られた。
- ③ 妙見宮は、次に音窪（秩父市下宮地）に祀られた。音窪は、伝承によると廣見寺の南側にある旧県立秩父東高校東側丘陵の窪地といわれる。
- ④ 1235年、落雷のため秩父神社が炎上。秩父神社再建にあたり妙見宮を合祀することとなる。
- ⑤ 妙見は「妙見七ツ井戸」（上宮地・中宮地・下宮地）を渡り秩父神社へ向かう。秩父神社へ渡って行く途中に10年ほど「妙見塚」（秩父市中宮地）に留まる。
- ⑥ 1320年頃、秩父神社社殿が再建され妙見菩薩が秩父神社に奉斎される。
- ⑦ 明治の神仏分離により、妙見菩薩と習合していた天之御中主神に祭神を改め、社名も「秩父神社」と旧に復し現在に至る。天之御中主神について、秩父神社では「宇宙創造神、俗に北斗七星の神として妙見様といわれる」と位置付け、地域で身近な妙見様として敬われ親しまれている。

以上のことから、妙見菩薩は宮崎山（前山）から音窪、そして「妙見七ツ井戸」を渡り宮地へと移動して秩父神社へ向かい、現在の秩父総鎮守である秩父神社に奉斎されたということが分かる（資料1）。妙見菩薩が渡っていった道筋は上宮地（JR 秩父駅東側辺り）から北へ進む国道140号線沿いで、この道筋7カ所に妙見の足跡を示したといわれる「妙見七ツ井戸」が伝えられ、この地域には妙見との縁が深いことから宮地（上宮地・中宮地・下宮地がある）という地名が残されている。妙見菩薩は七つの井戸を渡っていく途中、道中の真ん中辺り（「三の井戸」と「四の井戸」の中間）に10年ほど鎮座していたという。その場所は秩父市中宮地の関根家の敷地内にあり、現在も「妙見塚」として祀られており、神聖な場所として市の有形民俗文化財に指定されている。

次に妙見宮と愛宕神社の関係について述べていきたい。

現在、大野原にある愛宕神社については、前述したように（埼玉県神社庁神社調査団1986：1196）

推論の域を出ないが、落雷による社殿焼失のために遷座した妙見宮の跡地に火防の神として祀られた社で、妙見宮がその土地を移すにしたがって前山から宮崎に社地を移したとみることもでき、かつて妙見宮があった前山（宮崎山）に祀られていたことが分かる。

また妙見が移動していった道筋には、他所にもう一つ愛宕神社が存在する。それは中宮地にある愛宕神社である。境内に掲げられた改修誌には『秩父大宮妙見宮縁起』の中の次のような一文が記されている。「嘉禎元年（一二三五年）秋九月このあたりに祀られありし妙見宮が火雷の災にて煙炎となり果てぬ 夫以来は妙見宮を柞の杜（秩父神社）に合祀されたり 後の世すがに又の災をよきまつらんとてさきし宮籬の邊に火伏愛宕の神祠を営てけるは今にのこれり」。この文中の初めに出てくる「妙見宮」は「秩父神社」を指し、次に出てくる「妙見宮」は「宮崎台地の妙見宮」、「宮籬」は「妙見塚」を指していると考えられる。「宮崎台地の妙見宮」は「宮地の妙見宮」ということであるから、それは「妙見塚」を指していることになる。つまり『秩父大宮妙見宮縁起』の中の一文の2番目に記された「妙見宮」と「宮籬」は双方とも「妙見塚」を指していることになるのではないかな。なぜなら愛宕神社は「妙見塚」から300メートルほどの所に位置しており「宮籬の邊」に当てはまるし、その境内には「秩父夜祭」の6基の山車⁽⁴⁾のうち妙見の由緒を伝えているといわれる宮地屋台の収蔵庫があり、妙見由来の神社であるという伝承を裏付ける要素を持っているからである。また地域をあげて妙見の祭祀を守り伝えている地域でもある。改修誌には続けて「七百余年の昔からこの地の産土神として鎮座し」とある。今から七百余年の昔とは妙見宮が秩父神社へ合祀された時期である1320年頃に当たり、妙見宮が遷座した後、この地に愛宕神社が産土神として祀られたのではないだろうか。

これらのことから、筆者は、一つの愛宕神社が妙見宮の遷座した跡地に順々に移って行ったのではなく、妙見宮が遷座した各々の跡地にそれぞれ愛宕神社が祀られていき、その結果、現在、大原野と中宮地に妙見の由緒を持つ二つの愛宕神社が存在することになったのではないかと考える。

つまり、秩父地方の妙見は、最初宮崎山（前山）に祀られ、音窪へ遷座し、その後「妙見七ツ井戸（一〜三の井戸）」を渡り宮地の「妙見塚」に祀られ、再び「妙見七ツ井戸（四〜七の井戸）」を渡って秩父神社に奉斎されたということができよう。

Ⅲ 秩父地方の信仰体系にみる妙見との関わり

（1）屋敷神として宮地地域に伝わる妙見

秩父市中宮地の関根家の敷地内には「妙見塚」が祀られている（写真1）。この「妙見塚」は、妙見菩薩が秩父神社へ奉斎されるにあたり、秩父神社へ渡っていく途中に10年ほど鎮座していたと伝えられるところで、この道筋には7カ所に妙見の足跡を示したといわれる「妙見七ツ井戸」が伝えられている。妙見との縁が深いことから宮地という地名が残されており、神聖な場所として市の有形民俗文化財に指定されている。

関根家は、秩父神社から徒歩20分ほどのところにある九代続く秩父市内の旧家で、現在の当主は関根^{かずいち}一氏である。「妙見塚」は広い敷地を有する関根家の玄関前の庭に祀られている。平地より少し高くなった石塚で、石塚の上に木製の小さな祠があり中には御神体である直径20センチほどの丸い石を認めることができる。祠の両側には一対の丸い石が置かれており「妙見様の座り石」といわれ



写真1 関根家の敷地にある「妙見塚」

ている。

この「妙見塚」を守り伝えている関根家の周囲は、清く豊かな湧水をあちこちに認めることができる。この一帯は真名井原といわれ、かつて関根九兵衛氏（一一氏の本家の当主）が一帯を所有し管理していたという。真名井は、清浄な水につけられる最大級の敬称とされるが、宮地周辺は、その呼び名にふさわしい清々しい雰囲気を感じられる。

また関根家は、現在「妙見塚」を祀る家であり、妙見様が出て行ったという意味を表す

『出久知』という屋号でも呼ばれている。出久知は出口とも書き、関根家ではお墓にもその屋号が入っているそうである。1764年、4人の家族（一一氏の祖先となる）が馬1頭を伴い分家してこの地に住むようになったが、そのときすでに「妙見塚」は存在していたという。

江戸時代には神官を呼んで「妙見塚」で祭典を行い、近所の五人組で女性だけのヒマチ講⁽⁵⁾を行っていた（浅見 2013：77）。関根家では代々願い事や受験のときには必ず「妙見塚」にお参りしてきたという。また身内に戦死した人がいないのも妙見様のおかげだと伝えられている。

これらのことから、「妙見塚」は関根家が当地に移り住んだときから関根家の屋敷神的な存在として祀られ伝えられてきたのではないか。そして歴史的な伝承を持つ「妙見塚」は、関根家だけでなく地域の屋敷神としての役目も果たしてきたと考えられる。現在、次の三つの事例の中に「屋敷神的要素」を認めることができる。

① 「妙見塚」の幟立て

「妙見塚」の幟立てとは、「秩父夜祭」の2日前に、一対の幟旗を「妙見塚」の前に掲げる行事である。幟旗は、秩父妙見宮（現 秩父神社）から奉納されたもので、「奉献妙見宮 文久三年」と書かれている。「妙見塚」とこの一対の幟旗は、2003年に市の有形民俗文化財に指定された。『秩父志』には「出口へ往昔、妙見神ヲ字宮地ヨリ大宮町へ遷請シ奉シ時ニ、此所ヨリ奉送セシニ依テ今ニ此所ニハ十一月三日〔旧暦による秩父夜祭の日〕ノ夜、旗ヲ立テ祀ヲ舊式トス」（大野 1983：179）とあり、千嶋は「いまこの祭式は少し変形し塚上の妙見社の前にたたんだままの旗を供えている。旗は秩父神社から奉納されたものである」と述べており（千嶋 1981：174）、「妙見塚」と幟旗の歴史的な裏付けを知ることができる。普段、この幟旗は関根家の屋敷内の茶箱にしまわれ保管されている。関根一一氏によると、幟旗は「秩父夜祭」の期間中「妙見塚」の前にたたんで供えていたが、市の有形民俗文化財に指定されたのをきっかけに、2003年から再び「妙見塚」の前に掲げることにしたそうである。筆者は2015年11月29日に行われた幟立ての行事を見学する機会を得た。その内容は次のとおりである。

7時30分頃から「妙見塚」の前に地元青年部の人が集まり始め、8時頃から30人ほどで作業が始められた。関根家の軒から10メートルほどの2本の丸太を降ろし刺股でささえながら準備に取り掛

かる。最初に、丸太の上につける2本の榊を竹筒に挿し、榊に紙垂をつける。竹筒はかなり長いもので、この竹筒を2本の丸太の先に挿す。その後丸太を立ち上げ、この丸太を「妙見塚」の前の心棒（当日立てたもの）にボルトで固定する。次に幟旗を板棒につるし乳に結びながら少しずつ上げていき、8時30分頃立ち上げられた（写真2）。

この一對の幟旗は「秩父夜祭」の期間中掲げられ、宮地の田園風景の中にはためく様子をかなり遠くから望むことができる。



写真2 幟旗の掲げられた「妙見塚」

② 「秩父夜祭」本マチの朝の「妙見塚」への参詣

「秩父夜祭」は「妙見祭り」ともいわれるように、祭りの中に妙見の存在を認めることができる。宮地の辺りは特に妙見に対する意識が強く、宮地屋台関係者は、本マチの日の宮地屋台曳行開始前（12月3日7時30分頃）に「妙見塚」に参詣し、祭りの無事な遂行を妙見様にお願いし、その後、愛宕神社から屋台を曳き出す慣わしになっている。筆者は2015年12月3日の「秩父夜祭」本マチの日にこの行事に立ち会うことができた。その内容は次のとおりである。



写真3 宮地屋台関係者が「妙見塚」へ参詣
（「秩父夜祭」本マチ早朝）

7時30分頃から祭りの衣装をまとった宮地屋台関係者が関根家に集まり始め、8時頃から順々に幟旗の掲げられた「妙見塚」に参詣した（写真3）。参詣者は80人ほどに達した。その後、「妙見塚」の横で関根家から参詣者に朝食がふるまわれる。関根一一氏の妻トキ江さんの手料理で、ナマス、ポテトサラダ、煮しめ、オッキリコミなどたくさんの郷土料理が並べられた。朝食をふるまうというこの習慣は、「妙見塚」が市の有形民俗文化財に指定された2003年から続けられてきたという。朝食後、屋台関係者は宮地屋台曳行のため愛宕神社へ向かった。

③ 宮地に伝わる「妙見七ツ井戸」

『秩父志』に「妙見七ツ井戸」について「七星井ハ字宮地ニアリテセヶ所ノ名水トス、此ノ水ハ上中下ノ三所名井ニシテ一ハ上組天池ト云、一ハ井上ト云中組ニ二所アリ、一ハ下組井上ト云ニ二所アリ、一ハ中芝ト云ニ二所アリ、早ニモ涸コトナク霖ニモ溢コトナシ、奇井ト云フ」（大野1983：179）とあり、『新編武蔵風土記稿』にも「七ツ井 本社より西北の間に、其数七つ往々にあり、里民常用とす徑四尺許、平水二尺餘の清水にて、旱魃にも涸れず、洪水にも溢れずと云う」（蘆田1996：190）



写真4 五の井戸（「妙見七ツ井戸」より）
元旦の早朝、関根徳治氏の家では
「星の水」を汲む

と記され、七星井は宮地にある7カ所の名水で、旱魃にも涸れず長雨や洪水にも溢れることがなく奇井といわれると述べてられている。

妙見は、前述したように宮地と称する所に祀られていたが、やがて7カ所の井戸を渡り1320年ごろ秩父神社に奉斎されたと伝えられている（資料1）。この道筋7カ所に妙見の足跡を示した「妙見七ツ井戸」が今も伝えられ観光ルートの一つとなっている。実際に「妙見七ツ井戸」を巡ると、井戸というより小規模な七つの水場が整備されており清潔で豊かな湧水を認めることができる。

また、秩父市役所経済部観光課・彩の国ふるさと秩父観光情報館作成の説明書「秩父まちなか 伝説の道 妙見七ツ井戸」（2012）には、「妙見七ツ井戸」の由来について、妙見が秩父神社へ渡っていった地とする伝説の他に、二つの話が伝わっていると記されている。一つは弘法大師が水

不足をいたく思ひ召され清水を与えられたという譚、もう一つはやはり水飢饉に悩む木こりに柳の精が7カ所の湧き水の在処を教えたという譚である。

このルートの「三の井戸」と「四の井戸」の中間にある関根一一氏の家の敷地内には「妙見塚」が祀られている。

「五の井戸」（写真4）の近くにお住まいでこの井戸を所有している関根徳治氏から「五の井戸」について次のようなお話を伺った。「お正月には、先祖代々『星の水』を仏様、神棚にあげ、それで1年が始まる。『星の水』は、元旦の午前5時頃、北斗七星が輝いているときに『五の井戸』から汲んだ水で、関根家〔関根徳治氏の家〕では若水といわず『星の水』という。宮地は妙見様に近い屋台を持つ地域であり、妙見様つまり北斗七星にちなみ七ツの井戸が伝わっている」（2015.12.2）。

「七の井戸」のある所は「天帝場（デンデイバ）」という呼び名が残されており、『埼玉の神社 入間・北埼玉・秩父』に「〔「妙見七ツ井戸」のうち〕『当地の井戸は主星北辰（北極星）に当っており、北辰は天帝であることから、この地を天帝を祀る場—デンデイバー—という』とある」（埼玉県神社庁神社調査団1986：1198）と述べてられている。

（2） 村地域の氏神としての妙見

① 「秩父七妙見」

秩父地方では、妙見菩薩が「妙見七ツ井戸」を渡り秩父神社の社地に奉斎された後、秩父妙見の分社を郡境の交通の要所7カ所（第1所：小鹿野町藤倉 第2所：皆野町金沢 第3所：長瀬町矢那瀬 第4所：東秩父村安戸 第5所：都幾川村大野〔現 ときがわ町大野〕 第6所：名栗村上名栗〔現 飯能市上名栗〕 第7所：飯能市北川）に秩父妙見宮〔現 秩父神社〕の守護神として祀ったと伝えられている。この7カ所の妙見社は「秩父七妙見」と称され、秩父妙見宮（現 秩父神社）の鬼門にあたる箇所には置かれたといわれる（資料3）。

『秩父志』(大野 1983)にも、「秩父七妙見」の置かれた位置について「郡境ニ祭ル」「郡境七所ニ往古分祀セシナリ」「群境ノ村々七所ニ遷請シ奉ル」と記され、秩父妙見の分社を郡境の交通の要所7カ所に攘災の守り神として祀ったことが分かる。祀られた時期は明記されていないが、位置は資料3に示したとおりである。その多くが現在の秩父地方に含まれない境界辺りに位置しているが、当時は寄居、嵐山、ときがわ町、飯能も秩父と称していた。資料4は、「秩父七妙見」について、『秩父志』(大野 1983)、「秩父妙見研究序論 外秩父の妙見を祀る社寺の検討から」(若松 2011)、「秩父七妙見社」(宮澤 1994)の三つの資料を基に筆者が作成したものである。その結果「秩父七妙見」の第1・2・3所は不明であり、第5・6・7所は現在の秩父地方に含まれていないことが分かった。第4所の東秩父村安戸の^{みかた}身形神社のみが現在の秩父地方の内側に位置し、今も秩父地方に伝えられていると考えられる。そこで本稿では身形神社の氏子地区である安戸の帯沢地区に伝えられる妙見について調査を行った。

② 東秩父村安戸帯沢地区に伝わる妙見

A 東秩父村

東秩父村は、1956年大河原村と槻川村が合併してできた村である。埼玉県西部、秩父地方の最も東側に位置した埼玉県内唯一の村であり、外秩父山地に囲まれた自然豊かな山村である。平安時代から鎌倉時代にかけては、武蔵七党の一つである丹党の一族大河原氏が居住していたと伝えられる。都心から約70キロメートルのところに位置し、秩父の玄関口として、和紙や林業、養蚕を生業としてきた。特に和紙は伝統的特産品として1300年にわたり受け継がれ、東秩父村の「細川紙」は、「石州半紙」(島根県浜田市)と「本美濃紙」(岐阜県美濃市)とともに、2014年11月ユネスコ無形文化遺産に登録された。

東秩父村の大字は、東から安戸、御堂、奥沢、坂本、大内沢、皆谷、白石となっており、大字の一つである安戸は村の東部に位置している。帯沢川、入山沢の谷あいには集落が散在する山村で、槻川沿いに東西を貫く県道11号線(熊谷小川秩父線)が通じている。北辺のほとんどは官ノ倉山の稜線にあたり車両の通行は不可能である。安戸の小字には帯沢、宿、小滝、町北、大都、在家がある。安戸も江戸時代には和紙の市が立ち、宿地区は江戸から秩父へと通じる幹線路であった秩父往還の宿場町として栄えた。本稿では帯沢地区の氏神である身形神社を調査した。内容は次のとおりである。

B 身形神社——東秩父村安戸872(安戸帯沢)

身形神社は、県道11号線から南西へ500メートルほど入った小高い場所にあり(写真5)、帯沢地区を一望することができる。社殿には妙見宮の額が掲げられ(写真6)静謐な雰囲気のある漂う穏やかな社である。神社の本殿を囲む社叢(森)の中にある大スギは御神木として地元の信仰を集めている。本殿前の境内には、並んで立つ高さ1~2メートルの3本の石棒(写真7)が祀られている。身形神社の御神体である妙見は、一説には秩父神社の姉妹にあたるといわれ、秩父三姉妹伝説(三姉妹伝説の伝えられる神社については諸説あり)の1人と伝えられている。

身形神社の御神体(妙見立像)の像容について、若松は「岩座の上に立つ、高さ20センチ前後の木彫彩色立像であり、左手に蓮華を持ち、右手は施無畏印を示していた。また面相は温和かつふくよかであり、金銅製らしき宝冠を戴き、宝珠の付く輪光と天衣を伴っている。観音像との類似性もある



写真5 東秩父村安戸帯沢地区の「身形神社」



写真6 「身形神社」本殿に掲げられた額



写真7 「身形神社」本殿前の3本の石棒

が、先の反り上がる履を履き、袖の長い袍の上に腰甲らしきものを付けている点が相違している。髪型が確認できていないが、女性的な御姿の天部である」（若松 2011：29）と述べている。安戸に隣接する東秩父村御堂にある浄蓮寺住職・奥澤文請氏も、身形神社の御神体は妙見神立像であり厨子の後側に「天明二寅 天 成福寺」と書かれていると述べる（2014.12.5）。身形神社では御神体を修理に出していたため拝覧することはできなかったが、^{ごのかみせいじ}護守聖司氏（身形神社氏子総代 1942年生）に写真を見せていただいた。彩色が施された色彩豊かな像であり唇の朱が印象的である。若松が述べているように天部であろうと思われる。本殿には御神体として別に鏡も祀られていた。

成福寺については、護守氏によると「身形神社の御神体の台座裏に記された『成福寺』は、今は廃寺となっているが元は真言宗の寺で薬師堂（身形神社から徒歩5分ほどの帯沢地区にあり今は無人となっている）の辺りにあったといわれている。成福寺の物はみな薬師堂が引き継ぎ、現在は檀家だった13人が薬師堂を管理している」とのことである。

『埼玉の神社 入間・北埼玉・秩父』（埼玉県神社庁神社調査団 1986）作成のために、当時の調査申告者である身形神社責任総代の山崎平太郎氏が神社庁に提出した身形神社についての「昭和58・59年神社庁調査申告控」によると、通称名を妙見様とし「この山中に宗像三女神（福岡県宗像大社の御祭神）、海の守り神と申し上げてもよい神様が祀られて

居る」と記され、宗像三女神と妙見との関連を示唆している。神体については、現在の御神体として鏡と女神立像、法体神像、神体に準ずるものとして石（約1キログラム）、その他に3本の石棒と記されていた。この石は、若松の述べる「長径二十センチメートルほどの石皿の中心部に赤く塗った細い角棒を貼り付けた形代」で、「境内の社殿前方に据えられている〔3本の〕石棒と対をなすもの」（若松 2011：29-30）であろう。棟札には「天下泰平」「国土安穩」「郷中繁盛」「五穀成就」と記され

ており、地域の人々の身形妙見への祈りは「古態の持続性を維持する」志向が認められた。氏子区域については、帯沢、宮地、下川原、松ノ木平であったが、後に「帯沢、下川原、松ノ木平の字を一括して大字安戸帯沢区と云う」と記されている。妙見が祀られていた地域を宮地と称する場合があるが、今の帯沢地区辺りにも宮地という小字名が存在していたことが分かる。

現在、身形神社では毎月28日に行ってきた月次祭も行われなくなり、代わりに毎月最終日曜日に神社の掃除を実施するなど徐々に簡素化されるようになった。高齢化・少子化の影響で以前のように執り行うことは難しい状況であるという。

筆者は2015年の春祭りと夏祭りに参加した。祭りの後の直会では御神酒と豆腐と弁当がふるまわれた。直会の会場には、床の間に大きな金精様（木製）が飾られ、別室には磐裂神の掛け軸が掲げられていた。祭りの内容は次のとおりである。

【春祭り 2015年3月3日】

午前10時、普段無人の拝殿が開け放たれ、氏子役員が清掃・準備を行った拝殿に宮司、氏子役員、奏楽者、他の参加者7人が参集し、神職2人で祭典を執り行った。宮司は、祭典の途中で参拝に訪れた近くの保育園児たちのすぐ近くまで進みお祓いを行った。園児たちは頭を垂れ神妙な様子である。この祭祀は「星祭り」でもあり、星祭御札が授与される。奏上が述べられ、奏楽、玉串奉奠が行われ30分ほどで終了した。祭典終了後は直会となる。この祭りは豊作を祈願する祭りであるが、現在では新入学の祈願祭も兼ねている。氏子地区で今年は新入学児童が1名あったがこの春祭りには出席しなかった。

かつて「この日は『どうする日待（どうするびまち）』ともいわれ、年度替わりに当たっていたため、奉公人が祭りに合わせて里に帰り、『奉公またいくのかよ、どうするよ』と思案したものだという。当時の奉公先は、男なら紙屋、女なら秩父の機屋が多かった」（埼玉県神社庁神社調査団1986：1426）そうである。

【夏祭り 2015年7月20日】

夏祭りは「悪疫退散を祈願する祭りで、お祇園（オギオン）とも呼ばれている。神輿がないため村を祓う行事は行わない」（埼玉県神社庁神社調査団1986：1426）。宮司、氏子役員、奏楽者、他の参加者10人ほどが本殿に参集し、午前10時から祭典が執り行われた。奏上が述べられ、奏楽、玉串奉奠が行われ20分ほどで終了した。

（3）生産神として「地域振興の育成」に係る妙見

① 秩父神社の「御田植祭」と「秩父夜祭」

秩父地方では今も数多くの祭祀や民俗行事が伝えられている。本稿では、鎌倉時代末期から江戸時代まで妙見宮と称されていた秩父神社で行われる祭祀の中から「御田植祭」と「秩父夜祭」を調査し、祭祀の中にみられる妙見の特徴を明らかにした。

「御田植祭」「秩父夜祭」という二つの祭りの中で共通して重要な位置を占めているのは「水口の竜」といわれる新薬で作られた竜の存在である。この「水口の竜」が核となった二つの祭りは、秩父地方の1年を単位とした次のような譚を地域に伝えている。

4月4日、「御田植祭」の日に秩父神社入り口の大鳥居前を神田入り口に見立て、アーチ形の木製



写真8 秩父神社入口大鳥居前に掲げられた「水口の竜」
（「御田植祭」にて）



写真9 「秩父夜祭」の大櫓
（下の櫓に「水口の竜」が巻きつけられている）

の杵に長さ約5メートルの新藁が巻きつけられたものが設置される。「水口」と称するこの藁は「水口の竜」といわれ、竜頭尾が分かる竜の形状をしている（写真8）。この水口の竜を中心に行われる予祝神事が「御田植祭」であり、神社境内の敷石を神田に見立て、神歌を歌いながら模擬水田耕作が行われる。「御田植祭」が終わると、この「水口の竜」は11月まで秩父神社で祀られ保管される。そして豪華な屋台行事が繰り広げられる「秩父夜祭」本マチの12月3日に、大真榊を立てる榊樽（神籬神輿）に巻き付けられ（写真9）、神輿・笠鉾・屋台の神幸行列とともにお旅所〔大祭の3日の夜に6基の山車が終結して神事が行われる場所。この日に限って「お山」とも呼ばれる〕へ供奉し、亀の子石脇に奉安される。

春の「御田植祭」と冬の「秩父夜祭」という季節の対をなす二つの祭りは、一説には、武甲山（妙見山）の山の神が竜神となって春に里へ下りて人々に豊かな稔りをもたらし、冬の初めに再び山へ帰るという日本の伝統的

な祭祀形態を伝えるものであり、「祖先から連綿と伝えられ、人々に豊かな稔と幸福をもたらしってきた神事」（秩父神社社務所 2016）であるという。「水口の竜」はこの譚の核となる存在である。

「御田植祭」に登場する今宮神社は、秩父神社から西へ600メートルほど行った秩父市中町に位置しており、埼玉県神社庁ホームページで伝えている概要は次のとおりである。

今宮神社は古代より龍神池と言われる霊泉があり、ここに伊邪那岐・伊邪那美の二神が祀られていたが、大宝年間（701～714年）役行者が飛来し、神仏混淆を旨とする修験の教えを広めるとともに八大龍王⁽⁶⁾を合祀した。八大龍王神は「水」をつかさどる偉大な神である。毎年4月4日に行われる水分（みまくり）神事では、今宮神社から秩父神社に「水麻（みずぬさ）」が授与され、この「お水」が御田植祭に用いられる。この「お水」で育った稲が秋になり無事収穫されたことの喜びとともに、感謝の気持ちを込めてこの「お水」を再び武甲山に戻すお祭り、それが12月3日に行われる秩父神社の「秩父夜祭り」である（埼玉県神社庁：<http://www.saitama-jinjacho.or.jp/2016.2.28>）。

また「御田植祭」の準備について、『新編武蔵風土記稿』には「妙見の神事二月三日を田植の祭とてそれまでは女の業絹・木綿など織ることをせず、往古よりの風俗なりと云」（蘆田 1996：186）とあり、「御田植祭」の前10日あまりは、近在の農家が仕事（糸引き、機織り、農耕作業）を控えて日常の生活を慎み、祭りの準備のために過ごすこととしている。また、1709年2月に書かれた「忍藩

「秩父領百姓年中業覚」は秩父領の百姓（農民）の1年間の暮らしをひと月ごとに箇条書きにしたものであるが、その中にも、旧暦2月3日と11月3日（現在の3月3日と12月3日）の妙見の神事の前2週間は農耕作業や機織などを避けるようにと記され、祭りに備える気持ちが並々ならぬものであることを表わしている。

② 秩父神社「御田植祭」（4月4日）

秩父地方の「御田植祭」について栃原嗣雄は『秩父の民俗』の中で次のように述べている。

秩父の御田植祭りは、三月三日秩父市上蒨田の棕神社と、四月四日秩父神社の二か所で行われる。御田植祭りは、その年の稲の豊作を祈る神事なので古くからの稲栽培地帯には、広く分布しているようである。しかし内容的には年の初めに予祝として行う田遊び、春鋤、春田打などのように、芸能化されたものや、実際に田植の季節に神田などに植えるもの、境内を神田にみたと、模擬的に行うものなどいろいろある。秩父の田植祭りは、季節に先がけ予祝的に行うもので、境内に注連縄を張りめぐらし神田とみたと、実際の農耕順序に従い、苗代に水を引き入れ、種粃を播き、本田の収穫までの所作を田植歌を歌いながら模擬的に行うものである（栃原 2005：70）。

秩父神社「御田植祭」は2009年に埼玉県無形民俗文化財に指定されたが、その起源について、『日本民俗芸能事典』に「いつごろからこの神事がはじまったのかは未詳。万治2（1659）年の『秩父大宮妙見宮縁起写』が記録に現われる田植神事の初見であるが、その内容についての詳細は不明である。天保年間（1830～1844）には現在と同じ形式で行なわれていたようである。」（文化庁 1976：233）と記されており、約200年前には現在の形式で執り行われていたことが分かる。しかし1986年に行った埼玉県神社庁神社調査団による『埼玉の神社 入間・北埼玉・秩父』には、秩父神社「御田植祭」について次のような記述がある。

この神事は元来、市内蒨田の棕神社において古代から連綿と伝えられてきたものであった。ところが、永禄12（1569）年の武田信玄の焼き討ちにより同社が衰微し、この神事を続けることができなくなったため、棕神社氏子中の願い出により、元亀2（1571）年以降当社で行うようになったものである（埼玉県神社庁神社調査団 1986：1228）。

この資料から、秩父神社「御田植祭」は、1571年頃始められたということが分かる。また棕神社「御田植祭」は、信玄の焼き討ちの後「明治維新を迎えるまで中絶のやむなきに至った」（浅見 1975：76）という。現在は秩父神社と棕神社の両神社で行われており、稲作の過程を儀礼化した豊作の予祝として古式豊かな形式で始められ、その後も「秩父夜祭」のような華やかな付祭りを伴わず行われてきたといえよう。

秩父神社の「御田植祭」の具体的な祭りの進行は次のとおりである。

四月四日、神社境内の敷石を神田に見立て、苗代作りから種蒔き、田植え、収穫までの模擬水

田耕作が、神歌を歌いながら行われる予祝祭事。……（中略）……秩父中央地区農家組合の人々十二名が神部（白丁）となって奉仕する。……（中略）……〔神事に当たっては、まず五穀豊穡を祈る祭典があり〕、午後一時三十分、神官、笛、太鼓を鳴らす楽師に先導されて神部らが行列で西方の今宮神社へ「お水乞い」に行き、水幣に水神を憑依して頂く。順路を替えて戻ると、鳥居下に飾った蛇縄〔藁の竜神〕の鎌首の下に水幣を立てる。次いで白丁たちは社殿内で米飯・煮豆の供応を受ける。神官二名が「ささら」を摺りながら呪歌〔祈禱の場を清めるために唱える歌。また、福を呼び込み、災いや魔物を避けるために唱える歌〕を歌い、竹筒を使って坪割り擬態を演じる。終わると神田に出る（藺田稔監修 2005：24）。

次に、2016年の秩父神社「御田植祭」について、妙見を中心とした視点で述べていく。現在「御田植祭」は、秩父中央地区農家組合が核となり組織された御田植保存会（47名）を中心として行われている。

③ 2016年4月4日の秩父神社「御田植祭」

本殿の下の両脇に注連縄を張り、長い参道（長さ15間＝約27.3メートル、幅2間＝約3.6メートル）を、南北に長方形をなす神田（御田代）に見立て、祭場とする。この祭りの中で「御田植神事」の様々な所作を行う人を神部と称する。神部は、氏子農家を中心とした御田植保存会会員から選出されるが中には農業に従事していない人も含まれる。以前は1年12月を表し12名が選出されたが今回は22名であった。神部は白丁という白い装束、白いわらじ、菅笠をつけ、竹製の鍬を手にしている。この鍬は田をならす道具で、秩父神社で作られ、代掻き（水田に水を引き入れ土を砕きならして田植の準備をすること）の場で使用する。22名の神部の中から神事の主役となる作家老が1名選ばれる。作家老は黄色い衣装を纏い、先頭で伝統的所作を披露する。

御本殿の儀：13時～13時30分。本殿で秩父神社神事が行われる。宮司以下の神職と作家老が昇殿し、作家老は最後に水分の神の分霊の依代となる水幣を受ける。21名の神部は境内に並べられた椅子に座り神事に参加する。

御神幸行列（往）：13時30分～13時45分。「①先導大麻 ②水幣（作家老）③太鼓（2名で担ぎ、1名が太鼓打ち）④笛（楽人2名）⑤唐櫃（2名で担ぐ）⑥神職 ⑦神部全員」（秩父神社社務所 2016）の順に列をなし、秩父神社から今宮神社へ向かう。

水分神：14時～14時30分。今宮神社で、今宮神社宮司により水幣に水分の神の分霊が憑依される。

これで「田作りの水が戴けた」（秩父神社社務所 2016）ことになる。

直会：14時30分～14時45分。今宮神社でお神酒と塩を添えた大根の薄切りを神部以下全員に配る。この大根は秩父神社が今宮神社へ届けたお供物で最初に神前に供えることから、神人共食の意味合いがあり、神事後、参加者全員に振る舞われる。

御神幸行列（還）：14時45分～15時。来たときと違う道を通り、今宮神社から秩父神社へと帰還する。秩父神社に到着すると、秩父神社入り口大鳥居前の「水口の竜」の鎌首の下に水分の神の分霊が憑依した水幣を差し立てる。これで神田に水が満たされたことになる。実際に今宮から水を汲んでくることはしない。

坪割神事：15 時～15 時 30 分。神部全員が昇殿し、白飯・煮豆の供応を受けた後、本殿で坪割神事（稲の作付けの目安を立てる儀礼）が行われる。

御田植神事：15 時 30 分～16 時。作家老に続き 21 名の神部が、神田に見立てた細長い参道を何度も往復しながら、「田仕事の相談、苗代づくり：田打ち・くろぬり（畦ぬり）・代掻き・田ならし・種粃まき、本田づくり：田打ち・くろぬり（畦ぬり）・肥料まき・代掻き・田ならし・田植え・餅まき」の順に田仕事の所作を行う。演技中は田植唄が歌われる。「種粃まき」の際に使用する種粃は、6 月の「神饌田御田植祭」で植えた苗を秋に収穫し、12 月の「秩父夜祭」の新穀奉獻祭、例祭で供えた稲穂が使われる。この種粃は再び御神田に作付けされる（秩父神社社務所 2016）。



写真 10 神部により田仕事の所作が行われる
（秩父神社「御田植祭」にて）

御田植神事では音頭とりのもと、太鼓を鳴らしながら神部全員で田植唄を繰り返し歌い、それに合わせて順番に田植の所作を行う（写真 10）。田植唄は田の神を讃え豊作を願うとともに大変な作業への慰みでもあった。歌詞は次のとおりである。

御代ノ永田ニ 手ニ手ヲ揃ヘテ 急ゲヤ早苗 手ニ手ヲ揃ヘテ
一本植ウレバ 千本ニナル 神ノミタマノ 御年ノ苗（秩父神社社務所 2016）

田植唄の最後の歌詞「神ノミタマノ 御年ノ苗」の箇所は、江戸時代まで「とーとーほーしのたーね」であった。「星から頂いた種粃は一粒が千粒になると唱ったのであるが、この歌詞は明治初年『かみのみたまのとしのなーえ』と改められた。『とーとーほーし』が北斗・妙見神を意味していたからであろう。これが星霊＝穀霊信仰を反映する祭りであったと思われる」（千嶋 1989：28-29）と解釈する説がある一方、「とーとーほーし」は「トウトウボシと呼ぶ中国伝来の品種名か」（栃原 2005：80）、「大切な忌種の意を唄い込んだものであろうか。またホウシとは二十四節気の一、芒種の転訛であるかもしれない（柿界欣一郎氏教示）」（浅見 1975：75）とする説もある。

④ 秩父神社「秩父夜祭」（12 月 1～6 日）

「秩父夜祭」は、毎年 12 月 1～6 日に行われる「秩父神社例大祭」で、この 6 日間に秩父神社で行われる祭祀は次のとおりである。

- 1 日：御本殿清浄の儀 例大祭奉行祈願祭
- 2 日（宵マチ）：御神馬奉納の儀 新穀奉獻祭 番場町諏訪渡り
- 3 日（本マチ）：献幣使参向例大祭々典 御神幸祭 神幸行列進発 御神輿発御
御斎場祭（御花畑御旅所） 御神輿還幸

4日：蚕糸祭

5日：産業発展・交通安全祈願祭

6日：新穀奉獻感謝祭、併せて例大祭完遂奉告祭

この他、2日と3日に付祭りとして六つの屋台町（中近、下郷、宮地、上町、中町、本町の6町会）による豪華な6基の山車（屋台4台、笠鉦2台）が曳行され（2日は4基の屋台のみ）、屋台行事が繰り広げられる。この日のために各町の人々は何カ月も前からその準備のための日々を過ごす。

6基の山車は、1962年に国の重要有形民俗文化財に指定された。そしてこれらの山車で行われる屋台行事（笠鉦・屋台の曳行、屋台囃子、屋台芝居、曳き踊り）と秩父神社神楽は1979年に国の重要無形民俗文化財に指定され、2016年にはユネスコ無形文化遺産に登録された。秩父神社宮司・藺田稔は、秩父神社社報「柞乃杜」第11号「秩父の風土と『夜祭』」の中で「秩父夜祭」について次のように述べている。

いま全国に知られる「秩父夜祭」を、地元の住民たちは端的に「冬まつり」と言う。また近郷近在では「妙見まち」、北関東一帯の養蚕農家では「お蚕（カイコ）まつり」、そして東北から関東一円の露天商は「妙見さんの大市（タカマチ）」と呼び慣わしてきた。こうした通称はそれぞれ、この祭がもつ性格をよく表しているが、正式には、いうまでもなく埼玉県秩父地方の総鎮守、秩父神社の年に一度の大祭である。……（中略）……この大祭を彩る祭礼行事は、……（中略）……いずれも秩父神社の神幸祭にともなう「付け祭り」、つまり付帯の神賑わい行事として江戸時代中期から明治・大正にかけて地元各町が盛んにしたものにはほかならない。

そして、その核心をなす祭神出御の神事は、はるか古代に発祥した地元風土の神を祭る形式を今に伝えるはなはだ貴重な伝承祭祀なのである（藺田1994：4）。

また千嶋は、付祭りの始まった時期について「“屋台の発生＝付祭りの起源”と考えた上で、その発生時期を正徳2（1712）年から享保の初期頃（1722）までの十年間であろう」（千嶋1981：252）としている。

「秩父夜祭」は、秩父の総鎮守である秩父神社の霜月大祭という神幸祭（信仰行事）が根底にあり、近代に地元各町が中心となった芸能・娯楽的性格を備えた付祭り（神賑わい）、屋台行事が盛んに行われるようになり、現在の大掛かりで華やかな「秩父夜祭」の形式ができあがっていった。本来の神迎えという神幸祭がいつ始まったかということについては諸説あるが、屋台や笠鉦による華やかな付祭りを伴う形式になったのは、前述の資料から1700年代半ばと考えられる。現在の付祭りの形式は、寛政の改革のころ派手な付祭りが禁止されたが、江戸時代後期に復活し、その後、地元住民が作り上げてきた形式といえる。付祭りには次のような背景もある。

江戸末期から明治にかけて、秩父地方の名産「秩父銘仙」が絹織物の人気ブランドとして全国的に広まり、盆地の街道沿いのあちこちで絹市が開かれた。「年間を通して六歳市が開かれ、これによって近世農民の経済生活が支えられていた」（千嶋1981：198）。中でも霜月大祭で行われる「妙見さんの大市（タカマチ）」は盛大で、「お蚕まつり」ともいわれ多くの人で賑わったことから、大市に合わせ、付祭りが充実していった。千嶋は「秩父夜祭」は「付祭り＝産業振興祭という性格がはっきりう

かがえる」(千嶋 1981: 9) と述べている。祭りはその時代の経済構造を反映する一面を持つと考えられるが、「秩父夜祭」の付祭りは、近代の秩父において織物産業をバックアップし、産業都市としての発展に大きく貢献する役目を果たしたといえる。時代の流れとともに織物産業は衰退していったが付祭りを伴う「秩父夜祭」は、今も京都の祇園祭、飛騨の高山祭とともに「日本三大曳山祭り」に数えられる華やかな祭りとして全国に知られている。

また「秩父夜祭」には、地域住民に好意的に受け入れられ語り継がれている次のような譚がある。

神社にまつる妙見菩薩は女神さま、武甲山に棲む神は男神さまで、互いに相思相愛の仲である。ところが残念なことに、実は武甲山さまの正妻が近くの町内に鎮まるお諏訪さまなので、お二方も毎晩逢瀬を重ねるわけにもゆかず、かろうじて夜祭の晩だけはお諏訪さまの許しを得て、年に一度の逢引きをされるというのである。……(中略)……二日の晩に「お諏訪渡り」と言っ
て、神幸路の途中にある諏訪社に予め神幸祭執行を報告する神事があり、翌三日の晩には、神幸行列を先導する六台の笠鉦と屋台も、この諏訪社に近い地点を通過するときには屋台囃子の鳴りをひそめて静かにする例が守られている(秩父神社: <http://www.chichibu-jinja.or.jp/2015/4/14>)。

「秩父夜祭」については、祭りの成り立ちや運営、屋台などを対象にした数多くの先行研究がなされている。本稿では行事の概要についての記載は最小限に留め、2014 年と 2015 年の調査について、妙見を中心とした視点で述べていくこととする。筆者は、6 基の山車(中近・下郷笠鉦、宮地・上町・中町・本町屋台)のうち妙見に縁があるという宮地の屋台について、組立、祭りに係る行事、2 日と 3 日の屋台曳行について調査を行った。宮地屋台は六つの屋台町の一つである上宮地、中宮地、下宮地の 3 町連合で管理されており、普段は収蔵庫に厳重に保管されている。屋台収蔵庫は秩父神社から東へ 1 キロメートルほどのところに位置する愛宕神社(秩父市中宮地)境内にあり、宮地屋台保存会が所有している。愛宕神社は清々しい雰囲気が高い、氏神として地域の人々に慕われている様子をうかがうことができる。

⑤ 2014 年・2015 年 12 月の秩父神社「秩父夜祭」

A 準備(2015 年 11 月 29 日)

【宮地屋台の組立】

秩父の屋台のうち、最初にできたのが宮地屋台で格調高い雰囲気を持つといわれる。

宮地屋台について、「秩父夜祭」の際に配布される「宮地屋台と秩父歌舞伎」と題した 1996 年のプログラムには「宮地町はその昔、宮地と言う名前の示すとおり、妙見大菩薩が祀られていたという伝承を持ち、高張提灯と日月万灯一対を奉持して御神幸の先頭に立つこと。お旅所の屋台配置で最右翼に位置すること。三番叟の祝儀曲を踊ること。大祭当日、神社境内で歌舞伎の上演をする等々の特権を有す屋台である」(宮地屋台保存会 1996) と記されている。三番叟について、浅見は「宮地では三日の早朝町内を曳き出す際、屋台蔵のある愛宕神社境内で一回、秩父神社境内に曳きつけて一回、御斎場において一回、かならず三番叟を奉納する取り決めになっている。これを宮地の三々番とい



写真 11 老亀の描かれた宮地屋台の前幕
(屋台下段の竜の彫刻と合体して玄武となる)

う」(浅見 1975:236)と述べている。

屋台については、多くの詳しい先行研究、調査報告があるので、ここでは説明を省略するが、2015 年 12 月の組立作業や屋台曳行の場で、宮地にお住まいの宮地屋台関係者から、妙見に関して古くから伝わる次のような話を伺うことができた。

- ・地域に病疫、凶作が続いたため宮地屋台が船出して蓬萊山（不老長寿の仙人がいるという）を目指したのが始まりで、流れ着いた先は蓬萊、すなわち八代妙見であった。

そのとき船を支えたのが 15 匹の亀で、『腰

支輪の波に百態の亀の彫刻』といわれるように、屋台の腰支輪には波に漂う 100 匹の亀が表されている。

- ・屋台の 4 枚の襖は、波に大きく描いた日の出の図柄で、前幕を巻き上げると正面に太陽が出てくる構造になっており、昼の部と夜の部の 2 組を有し星辰信仰に通じる。
- ・老亀の描かれた前幕を巻き上げると、屋台下段の竜の彫刻と合体し玄武となる（写真 11）。
- ・日月万灯は宮地のみに伝わる日月一对の万灯（日月の作り物）である。12 月 3 日の早朝（午前 5～6 時頃）、15 人ほどで愛宕神社を出発し秩父神社境内の宮地屋台を置く箇所はこの日月万灯を立ててくる行事があり、これは妙見に由来するといわれる。朝は「右側（東）に日（太陽）、左側（西）が月」、夜は「右側（東）に月、左側（西）が日」となるように置く。3 日夜の神幸行列では、先頭の先導大麻、大榊、猿田彦の次に日月万灯が続く。
- ・三番叟は物事の始めということで、天下泰平、五穀豊穰を寿ぐ踊りである。

B 宵マチ（宵宮）（2014 年・2015 年 12 月 2 日）

秩父神社の行事「御神馬奉納の儀」「新穀奉献祭」「番場町諏訪渡り」と、付祭りである 4 基の屋台曳き回しが行われ多くの観光客で賑わった。

この日の特徴ある行事はお諏訪渡りである。

【お諏訪渡り】

お諏訪様は秩父神社から徒歩 5 分ほどの所にある広い駐車場の一角（番場町にある市場の跡地）に祀られている（写真 12）。「お諏訪渡り」は、実際は祭りが無事に終わるように祈りを捧げる神事であったが、その内容が入れ替わり江戸時代からおもしろおかしく伝えられ、現在では前述した妾の話が広く伝えられている。



写真 12 番場町に祀られている「お諏訪様」

19時、番場町会所前（秩父神社鳥居前の妙見通りを渡り、少し進んだ所）に番場町会役員、関係者、市場関係者、屋台町会代表者など100人ほどが集まり、高張提灯、神職を先頭に行列となって、太鼓・笛を奉奏しながらお諏訪様に向かって進んでいく（写真13）。19時10分頃からお諏訪様の前の祭場で祭典が厳粛かつ盛大に行われた。秩父神社の神職3名が、お諏訪様へ祝詞を奏上し、各屋台町代表者による玉串奉奠の後19時35分に終了した。その後は直会となる。



写真13 「お諏訪渡り」（「お諏訪様」に向かって進んでいく）

C 本マチ（2015年12月3日）

【宮地屋台出発】（宮地の愛宕神社→秩父神社）

8時20分に愛宕神社の倉庫が開けられ、8時30分からの式典の後、境内で三番叟を奉納し10時に出発した。秩父神社到着までの間、町の辻などに屋台を止め7回の「曳き踊り」を行った。7回行うのは北斗七星に通じるとも七ツ井戸にそれぞれ奉納するともいわれる。13時、秩父神社に到着し宮参りを行う。秩父神社神門前で三番叟奉納（写真14）後、神楽殿の方へ移動し19時の曳行行列出発までの間境内に待機する。



写真14 宮地屋台が秩父神社神門前で三番叟を奉納（「秩父夜祭」本マチにて）

【神幸行列・山車の曳行】

17時頃から秩父神社は入場規制となり、17時30分に神幸行列が出発した。

先頭は、神の依代となる紙垂をつけた大櫛である。その根元には4月に秩父神社で行われた「御田植祭」の時の藁の竜が巻きつけられている（写真15）。大櫛に続くのは道案内役の猿田彦。宮地町の日月万灯、楽人、錦旗、妙見様の化粧箱である御手箱、太刀箱の列である。次に氏子各町の供物と高張提灯の行列。御神饌、大幣束に続き神霊を遷した神輿、秩父神社の宮司や神官、氏子の大総代、市町村長など。しんがりをもつ2頭の御神馬がつとめる（園田稔監修2005：46）。



写真15 「秩父夜祭」本マチ神幸行列の大櫛
（下の櫓に「水口の竜」が巻きつけられている）

18時15分に中近屋台、18時55分に宮地屋台が秩父神社を出発し、続いて下郷笠鉾も神社前を通

過した。その動きは海に出た八幡船に例えられ、常世の国へ向かって船出するような豊かで優雅な雰囲気漂わせている。昼間に見る屋台・笠鉦からは想像できない情景である。19時頃からたくさんの花火があがり、祭りをいっそう盛り上げている。

神幸行列、屋台・笠鉦は、2時間ほどかけて市内の大通りをゆっくりと巡行し、お旅所へ向かう。地域住民や観光客はその光景を見ながら市内を歩き回りあちこちで声援を上げる。21時10分、最後の屋台が団子坂の角を曲がりお旅所へ到着すると、6基の山車が斎場を中心に扇を広げた形で勢ぞろいし華やかな光景が繰り広げられた。

22時になると入場規制で自由に出入りすることができなくなったお旅所が開放となった。斎場には「亀の子石」が祀られており、その背中に神霊の宿る大幣束が立てられ神輿が安置されている。これは妙見神が出現したことを表しているという。その横には神馬がつながれ、根元に藁の竜が巻きつけられた大榼が安置されている。幕に囲まれた斎場の中で神楽奉納、玉串奉奠など神事がおごそかに執り行われた。神事終了後、来場者は大榼の紙垂をつけた枝を奪い合う。この榼は縁起物として1年間大切に家に飾るそうだ。養蚕が盛んなころはこの大榼に繭の豊作を託したものだという。屋台では、最初に宮地屋台が三番叟を奉納し順次舞が奉納された。

23時20分頃、中近屋台を先頭に6基の山車が順次お旅所から降りていった。宮地屋台は4日の午前3時頃愛宕神社に帰還したという。午前10時頃から、80人ほどで屋台の解体が行われた。

IV 現在の秩父地方における妙見

(1) 秩父地方における妙見への意識——聞き書きを中心に

これまで秩父市中宮地の関根家とその地域に伝わる妙見、秩父地方に伝わる「秩父七妙見」、秩父神社の祭礼「御田植祭」と「秩父夜祭」を調査してきたが、ここでは秩父地方の人々の妙見に係る意識を民俗の視点から探してみる。

【秩父市上宮地・中宮地・下宮地に伝わる妙見】

2015年6月27日に、「妙見塚」を守り伝えている関根家（秩父市中宮地）を訪問し、秩父市宮地に伝わる妙見についてお話を伺う機会を得た。

〈語ってくださった人〉

関根一一氏（関根家当主、1943年生）

関根トキ江氏（関根一一氏の妻、1947年生）

加藤喜男氏（関根一一氏の親戚、1933年生）

- ・「妙見塚」に太く美しい注連縄が掲げられていることについて「妙見塚」の祠の注連縄は志木（埼玉県志木市）の農家の人が作って届けてくれたため、勝手に新しいものに替えられずそのままにしてある。祠の中には丸石のご神体を認めることができるが、どこかに金精様のような形状のご神体があるといわれている。
- ・夜祭で屋台を倉庫にしまった途端に大雨になった年があるが、屋台がぬれずにすんだのは妙見様のおかげといわれている。
- ・大雨で屋台に上ることができなかった年は「妙見塚」にお参りしなかったからだというエピソード

もある。

- 関根家では、体調がすぐれないときや子供の受験、気の迷いなどの際には「妙見塚」に参詣した。子供たちも小さなころから願い事があると必ず「妙見塚」へお参りした。一族のものは今でも受験のときには必ずお参りにやって来る。
- 今70歳代の人からは、戦後しばらくの間、近所の人でも神社の代わりに「妙見塚」に参拝したという話を聞く。
- 江戸時代には5人組制度があり5件の家で女性だけの妙見の祭りを行っていた。次第に近所の人も参加するようになり、1965年頃までは「妙見塚」の前で4月15日に妙見祭を行い、15人くらいでお日待ちをし、秩父神社からいらした神職が「妙見塚」を拝んでいた。
- 夜祭は正月が1年に2回あるといわれるほど大掛かりなものだ。夜祭が終わるまで針仕事はしないといわれるが、これは祭りの準備で女性がいかに大変かということを表している。夜祭が終わると秩父の冬が始まる。

【身形神社のある東秩父村安戸帯沢地区】

- 夏祭りはオギオンともいわれる。身形神社は八坂神社も合祀しているが、八坂神社は身形神社の境内にはなく安戸地区の別の場所にある。オギオンは、悪疫退散を祈願する祇園祭が起源だが今は身形神社の祭りとなっている。昔は神輿があり、山車も出たというが、いつごろのことか分からない。今は神輿がないので祭典のみが行われている。前日のお籠もりも行われなくなった。(身形神社氏子総代の護守聖司氏、2015.6.18)
- 集落は全員で100人位であり独り暮らしが多い。帯沢地区では桃などを生産しているが、今は勤め人がほとんどである。身形神社は帯沢地区の中心に位置しており、帯沢川には、昔、妙見淵という地元の人に親しまれている水のきれいな場所があった。夏には大人も子供も喜んで飛び込んだり泳いだりしたものだ。妙見淵には大きな石があったが工事で壊され今はなくなってしまった。帯沢川は昔から水がきれいで、たくさんのアユがとれる。(帯沢地区にお住まいのY氏、2015.7.20)

【その他妙見に係ること】

- 夜暗くなると、秩父神社本殿の屋根の真上に北極星が輝くのを見ることができるが、これは星の信仰に通じるのではないか。(秩父神社神職、2015.11.28)
- 番場通りは何故か後家が多いといわれ、子供のころから母親や祖母が番場通りを「後家通り」と呼んでいた。理由は、番場通りは秩父神社に通じる道で、本妻（お諏訪様）のいる場所から1本ずれており、妙見様が本妻でないからだといわれる。(番場町にお住まいの50代女性、2015.12.2)

(2) 秩父地方に伝わる妙見の現代的意義

ここまで現在の秩父地方における妙見の信仰体系の中の三つの要素「屋敷神的要素」、地域の「氏神的要素」、「生産神的要素」を視点とし秩父地方に伝わる妙見について調査を進めたところ、現在の秩父地方の妙見には、「古態の持続性を維持する」志向と、妙見の祭祀を媒介とし「地域振興の育成」に貢献する様相を認めることができた。

まず今回調査した三つの要素の調査内容から述べる。

一つ目の「屋敷神的要素」については、秩父市中宮地にある関根家の敷地内に祀られている「妙見

塚」とその周辺地域に伝えられる妙見を調査した。その結果、「妙見塚」は関根家の屋敷神的存在であり、現在も守り伝えられているとともに、地域の人々からも大切な存在として意識されていた。それは「秩父夜祭」に備えて「妙見塚」の前に幟旗を掲げたり、本マチの早朝、屋台関係者が祭りの無事な成就を願い参詣したりするなど「秩父夜祭」の重要な祭祀を担っていること、秩父地方の妙見の中心である秩父神社とも密接な関係を保っていることなどに表れている。またこの辺りの宮地と称する一帯には、妙見菩薩が秩父神社に奉斎されるときに渡って行ったとする「妙見七ツ井戸」が伝えられ、豊かで清潔な湧水が生活用水に使われているとともに妙見に由来する譚も伝えられていた。

二つ目の地域の祭神としての一面を持つ「氏神的要素」については、秩父地方の妙見の中心である秩父神社を災いから守るために祀られたと伝わる「秩父七妙見」の一つ、身形神社を調査した。明治時代の神仏分離まで妙見社といわれた身形神社は、静謐な雰囲気漂う穏やかな社であり、厄災消除、五穀豊穰という「古態の持続性を維持する」志向が代々引き継がれ、地域の人々が集まるための地域の求心力となっていることがうかがえる。御神体についても、寺院に伝えられていたことがほぼ確実である天部と思われる妙見立像を、地域の人々の協力のもと、神社の御神体として丁重に祀り保存し伝えている様子は、神仏混淆の時代の妙見をそのまま伝えているということであり、妙見に対する地域の人々の意識は以前と変わらず、そして今後も守り伝えていく心意気が伝わってくる。

三つ目の「生産神的要素」については、秩父神社で行われる祭祀「御田植祭」と、「お蚕祭」ともいわれた「秩父夜祭」を調査した。この二つの祭祀に係る人々は、現在、秩父市内で農業や商業、加工業等、主に生産業に携わっており、妙見への祈りは生産神への祈りとなっている。

次に三つの要素「屋敷神的要素」「氏神的要素」「生産神的要素」の相互関係について述べると、この三つの要素は、互いに影響し合う一面を持っていた。それは「秩父夜祭」の中で「屋敷神的要素」である「妙見塚」に係る祭祀「『妙見塚』の幟立て」「本マチ早朝の『妙見塚』への参詣」が行われている点や、「御田植祭」「秩父夜祭」の中に地域の氏神としての要素が含まれている点である。また「妙見七ツ井戸」から湧き出る伏流水は農業や生活用水に使われており、妙見は、生産神に係る神である農業神としても信仰されている。生産には水が重要な位置を占めるが、「御田植祭」は、伏流水、水脈、竜水などに象徴される水神の存在にも関わっていた。

以上の調査を踏まえ、現在の秩父地方の妙見を概観すると、次の二つの様相が認められた。

一つは「古態の持続性の維持」、もう一つは生産神としての妙見の祭祀を媒介とし「地域振興の育成」に貢献する妙見である。

「古態の持続性を維持する」妙見は、「屋敷神的要素」を持つ妙見と「氏神的要素」を持つ妙見の中に伝えられていた。

人々の祈願の内容について松本三喜夫は「神社が宣伝している『ご利益』をみると、……（中略）……信仰の古さや本来の意味からすれば、息災と厄除を神にお願いするといったかたちがおそらくは最も基本ではなかったろうか。」（松本 2015：20-21）と述べ、祈願内容は概ね二つに分類でき、一つは厄災消除、五穀豊穰という基本的な祈りの形態であり、もう一つは人間の欲や煩惱に基づいた祈願といえると論じている。

中宮地の関根家での妙見への祈りは日常生活への身近な事柄であり、身形神社の棟札には「天下泰平」「五穀成就」など基本的な祈願が掲げられていた。「屋敷神的要素」を持つ妙見と「氏神的要素」

を持つ妙見への人々の祈りは、厄災消除、五穀豊穰という「古態の持続性を維持する」志向が代々引き継がれているといえよう。

「地域振興の育成」に貢献する妙見は、「生産神的要素」を持つ妙見の祭祀の中に伝えられていた。生産神の関わりの一つに都市祭礼があげられるが、都市祭礼は人々を集客し町を観光事業化して収入増につなげ、「地域振興の育成」に大きく貢献する作用がある。「秩父夜祭」の展開にもその作用を読み取ることができる。「秩父夜祭」は、まず妙見信仰があり、その信仰行事である神幸祭が伝統を守り伝えられているが、「秩父夜祭」を華やかに盛り上げている付祭りは絹大市に来る人を歓迎するための催しとして始められ、当時の社会情勢に影響を受けながらも秩父神社を中心に勢いを増し、産業都市としての発展に大きく貢献する役目を果たしてきた。現在は夜祭最大の祭礼行事となっている。祭りはその時代の経済構造を反映する一面を持つが、「秩父夜祭」の変遷は秩父地方の産業都市としての近代化への推移を反映してきたといえる。

おわりに

本稿では、多くの場面で妙見の存在を認めることができる秩父地方を事例とし、秩父地方に今も伝わる妙見を明らかにすることを目的とした。

秩父地方における妙見の信仰体系の中には「屋敷神的要素」「氏神的要素」「生産神的要素」を認めることができる。この三つの要素に基づく現地調査の結果、現在の秩父地方には、「古態の持続性を維持する」妙見と、妙見の祭祀を媒介とし「地域振興の育成」に貢献する妙見の二つの様相が認められた。

「屋敷神的要素」「氏神的要素」に基づく調査では主に「古態の持続性を維持する」妙見が認められ、「生産神的要素」に基づく調査では「地域振興の育成」に貢献する妙見を認めることができた。しかし「屋敷神的要素」に基づく調査では、「妙見塚」の祭祀が一部「秩父夜祭」に係るものであるなど、「地域振興の育成」に貢献する妙見との関わりも認められた。秩父地方における妙見の信仰体系の中に位置する「屋敷神的要素」「氏神的要素」「生産神的要素」の三つの要素は互いに影響し合う一面を持っているといえることができる。また、生産神の関わりの一つに都市祭礼があげられるが、都市祭礼は人々を集客し町を観光事業化して収入増につなげ、「地域振興の育成」に大きく貢献する作用があり、「秩父夜祭」付祭りの展開にもその作用を読み取ることができた。「秩父夜祭」付祭りの変遷は秩父地方の産業都市としての近代化への推移を反映してきたといえることができる。

現在、妙見は秩父地方に深く根付き、地域に「古態の持続性を維持する」一面と、生産神としての妙見の祭祀を媒介とし「地域振興の育成」に貢献する一面を持っている。秩父地方の人々は好感と誇りを持って妙見を受け入れ、「秩父夜祭」をはじめ一年を通じて妙見の行事に積極的に取り組む日々を過ごしている。今後も、妙見を地域の屋敷神・氏神として尊ぶとともに、秩父神社を核とし妙見を求心力として地域振興をさらに推し進めていくことであろう。

註

- (1) 直江廣治は、祭祀者の範囲という観点から屋敷神を「各戸屋敷神」「本家屋敷神」「一門屋敷神」に類型化した。本論文では、本家に属する屋敷神を同族が一同となって祀る「一門屋敷神」と定義する。
- (2) 「氏神は時代により場所により複雑な変化を遂げた。現在『うじがみ』と呼ばれるものは、柳田國男によれば、①村氏神、②屋敷氏神、③一門屋敷神の三種に分けられる、という。」(『日本の神仏の辞典』2001:169)とあるが、本稿では、①にあたる広義な意味での地域を守護する神と定義する。
- (3) 本稿では、「漁業・商業・農業などの生産活動に幸をもたらす神霊」とされる「えびす」(『日本民俗辞典』2006:85)に通じる福神と定義する。
- (4) 「秩父夜祭」の付祭りでは、屋台4基(宮地、上町、中町、本町の4町会)と笠鉾2基(中近、下郷の2町会)による屋台行事が行われる。本稿では、屋台と笠鉾の両方を合わせて言い表すときは「山車」と表現する。
- (5) 特定の日に集まったりあるいは籠りをしたりすること。講が組織されて行われていることが多い(『日本民俗辞典』2006:453)。
- (6) 竜は蛇型の鬼神で、天竜八部衆の一。わが国では水神信仰と習合して、湖沼の水神に八竜権現など、八大竜王にあやかった神格を付している場合が多く、雨乞いの神ともなっている(『岩波 仏教辞典』2002:825)。

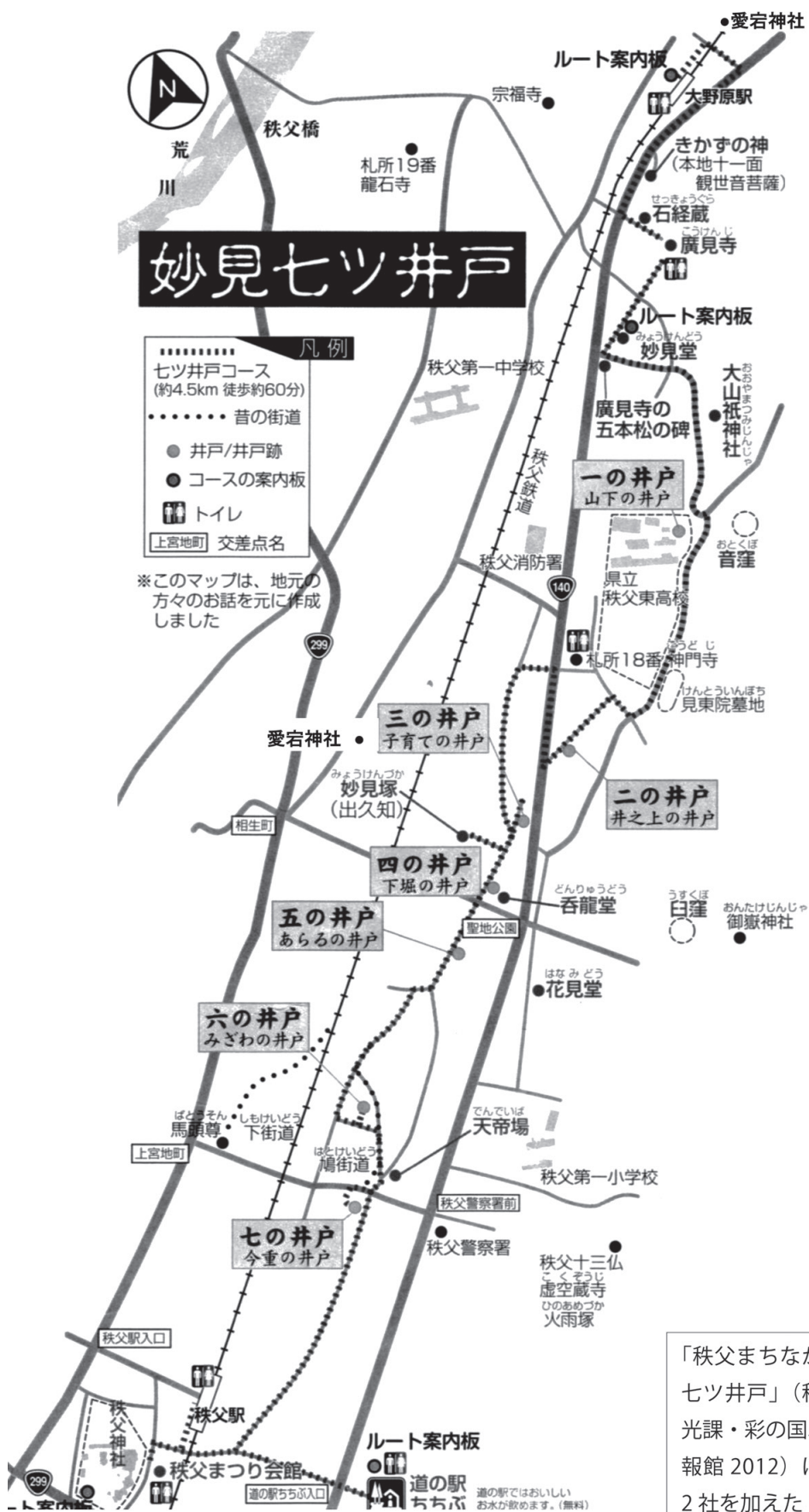
引用・参考文献

- 浅賀ひろみ 2009 「秩父の祭りと秩父屋台囃子の歴史に関する研究」(『白鷗大学論集』第23巻第2号) 399-421 白鷗大学
- 浅見清一郎 1970 『秩父 祭と民間信仰』 有峰書店
- 浅見清一郎 2013 『秩父神社例大祭屋台とその沿革』 秩父市教育委員会
- 蘆田伊人 1996 『新編武蔵風土記稿』第12巻 雄山閣
- 飯野頼治 2009 『東秩父村風土記 地図で歩く里山19コース』 野外調査研究所
- 井上勝海 1997 「奥武蔵妙見考——我野神社・喜多川神社と秩父妙見——」(『あしなか』第249号) 16-21 山村民俗の会
- 大島建彦・他編 2001 『日本の神仏の辞典』 大修館書店
- 大野満穂 1983 『秩父志』(『埼玉県叢書第1巻』) 国書刊行会
- 金指正三 2007 『星占い星祭り』 青蛙房
- 甲田豊治 2014 「妙見信仰習合七百年 妙見像と亀の子石」(秩父神社社報「柞乃杜」第50号) 7
- 埼玉県 1988 『新編埼玉県史 通史編3』 埼玉県
- 埼玉県 1991 『新編埼玉県史 資料編14』 埼玉県
- 埼玉県神社庁神社調査団 1986 『埼玉の神社 入間・北埼玉・秩父』 埼玉県神社庁
- 佐野賢治 1994 『星の信仰 妙見・虚空蔵』 北辰堂
- 清水武甲・千嶋壽 1983 『写真集明治大正昭和秩父——ふるさとの思い出』 国書刊行会
- 清水武甲・千嶋壽 1986 『秩父路50年』 新潮社
- 藺田稔 1994 「秩父の風土と『夜祭』」(秩父神社社報「柞乃杜」第11号)
- 藺田稔 1990 『祭りの現象学』 弘文堂
- 藺田稔監修 2005 『秩父夜祭』 さきたま出版会
- 千嶋壽 1981 『秩父大祭 歴史と信仰と』 埼玉新聞社
- 千嶋壽 1989 『秩父神社』 さきたま出版会
- 秩父市観光協会 2015 「所作・曳き踊り」(平成27年 秩父夜祭解説書)
- 秩父市役所経済部観光課・彩の国ふるさと秩父観光情報館 2012 「秩父まちなか 伝説の道 妙見七ツ井戸」
- 秩父地区文化財担当者会 2001 『中世の秩父 資料集』 秩父地区文化財保護協会

- 栃原嗣雄 2005 『秩父の民俗 山里の祭り暮らし』 幹書房
- 直江廣治 1966 『屋敷神の研究——日本信仰伝承論——』 吉川弘文館
- 中西用康 2008 『妙見信仰の史的考察』 相模書房
- 中村元・他編 2002 『岩波 仏教辞典 第二版』 岩波書店
- 中村孚美 1972 「秩父祭り 都市の祭りの社会人類学」(『季刊人類学』第3巻第4号) 149-190 京都大学
人類学研究会
- 東秩父村 2005 『東秩父村の歴史』 東秩父村
- 福田アジオ・他編 2006 『精選 日本民俗辞典』 岩波書店
- 文化庁 1976 『日本民俗芸能事典』 文化庁
- 松本三喜夫 2015 『歴史と文学から信心をよむ』 岩田書院
- 丸井敬司 2013 『千葉氏と妙見信仰 岩田選書 地域の中世13』 岩田書院
- 宮澤傳 1994 「秩父七妙見社」(埼玉県神社庁報 No. 134) 埼玉県神社庁
- 宮地屋台保存会 1996 「宮地屋台と秩父歌舞伎」(平成8年 秩父夜祭プログラム)
- 若松良一 2011 「秩父妙見研究序論 外秩父の妙見を祀る社寺の検討から」(『埼玉県立川の博物館紀要 第11号』) 29-40 埼玉県立川の博物館

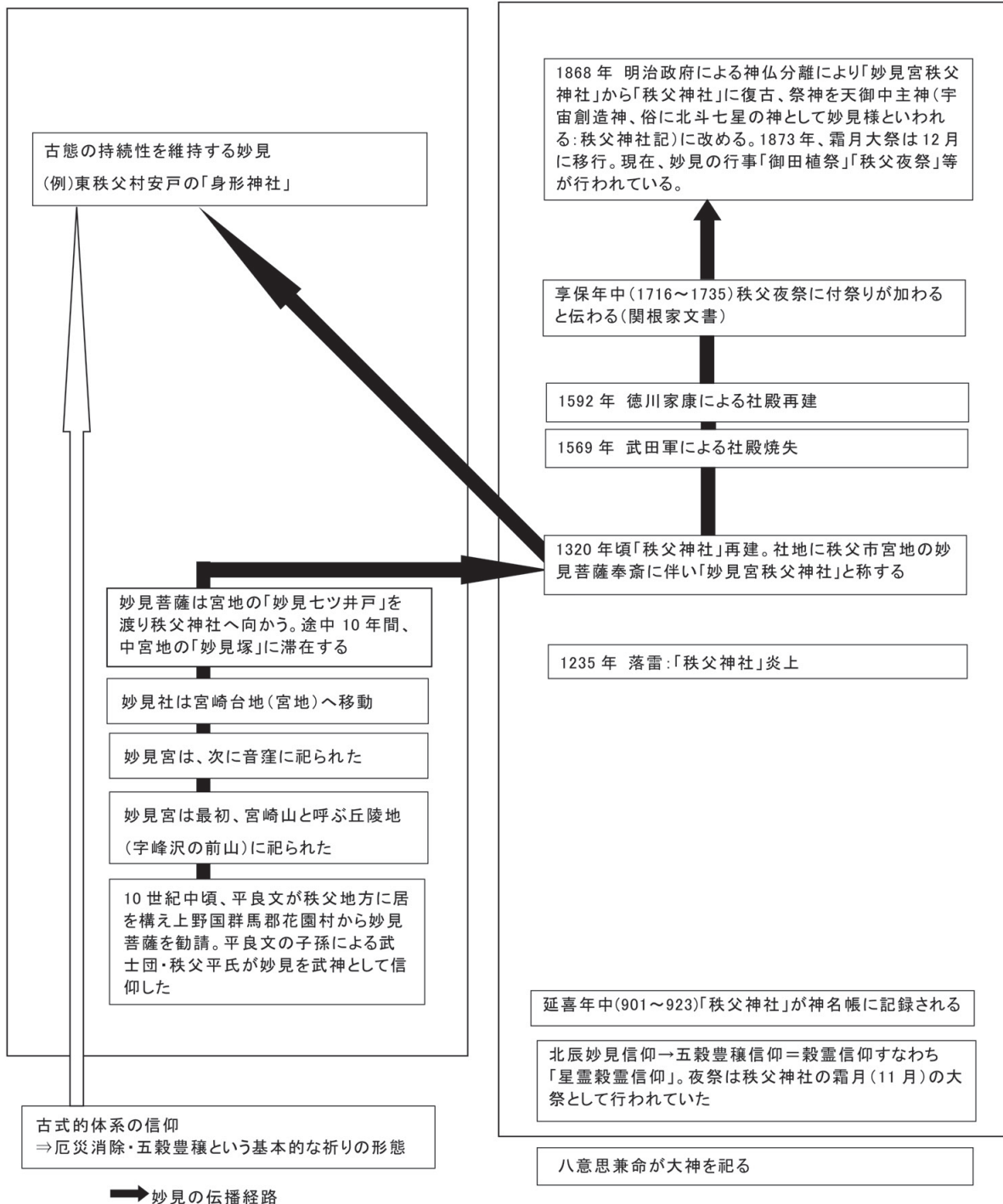
引用・参考映像・ホームページ

- 埼玉県神社庁：<http://www.saitama-jinjacho.or.jp/> (2016/2/28)
- 神社本庁：<http://www.jinjahoncho.or.jp/> (2016/2/28)
- 秩父市：<http://www.city.chichibu.lg.jp/> (2015/4/14)
- 秩父神社：<http://www.chichibu-jinja.or.jp/> (2015/4/14)
- 廣見寺：<http://www.chichibu.ne.jp/~kokenzi/> (2015/4/14)



秩父地方の妙見

秩父神社の変遷



『秩父夜祭』(蘭田稔監修 2005 さきたま出版会)、『秩父神社』(千嶋壽 1989 さきたま出版会)、
『秩父大祭 歴史と信仰と』(千嶋壽 1981 埼玉新聞社)、『埼玉の神社 入間・北埼玉・秩父』(埼玉県
神社庁神社調査団 1986 埼玉県神社庁)を参考に筆者が作成

「秩父七妙見」の位置



「秩父七妙見」の所在地

- 第1所：小鹿野町藤倉① 第2所：皆野町金沢② 第3所：長瀬町矢那瀬③
 第4所：東秩父村安戸④ 第5所：都幾川村大野（現 ときがわ町大野）⑤
 第6所：名栗村上名栗（現 飯能市上名栗）⑥ 第7所：飯能市北川⑦

資料 4

秩 父 七 妙 見

	所在地	『秩父志』の記述	現状「秩父七妙見社」(宮澤 1994)	現状	現在の祭神
第1所 妙見社	小鹿野町藤倉	妙見社ハ此村ノ続キ山中ニアリ、古ヘハ此マデ秩父郡ノ内ナリ、大宮妙見神ヲ七所ニ勧請セシ其一所ニシテ郡境ニ祭ル所ナリ。[大野 1983 246]		明らかではない	
第2所 妙見社	皆野町金沢 (かねざわ)	此村ノ続ニ出牛村ト云所ニ、秩父七所妙見神社アリ、今ハ當國見玉郡ノ郡内ニ入テ秩父ノ境中ニアラズ、此社ハ郡境ノ所々ニアリテ、大宮ノ妙見神社ヲ郡境七所ニ往古分祀セシナリ、コレ其内ノ一所ナリ按フニ天曆ノ頃マデハ此出牛村ノ接隣ニテ、太駄村ノ内杉木峠ト云フノ山頂ヲ郡境トセルナランカ。[大野 1983 256]	すでになく、かつて金沢の出牛（じゅうし）耕地内にあった七所様と呼ばれた祠がこれに当たると思われる。	明らかではない	
第3所 妙見社	長瀬町矢那瀬	矢那瀬妙見ノ社ハ今ハ榛澤郡末野村ノ境内ニ入り属ス、往古ハ此末野村ノ内ノ境川ト云。秩父郡ノ郡境トス、此ノ妙見神祠ハ秩父七所妙見ノ四個所ニテ、大宮町妙見神ヲ郡境ノ村々七所ニ遷請シ奉ル所ナリト云フ。往昔ハ矢那瀬村ノ総鎮守ナリシガ今ハ末野村ノ総鎮守トナリテ、初穂此村ヨリ献ジ祀ルト云。[大野 1983 263]	明治四十二年に末野神社に合祀となった字関口の無格社天御中主神社がこれにあたると推測される。	「末野神社」に合祀になった字関口の「天御中主神社」であろうか	
第4所 妙見社	東秩父村安戸	妙見ノ神社ハ安戸村ニアリ、秩父七妙見ノ四所ニテ大宮町ノ妙見神ヲ郡境ノ村々七ヶ所ニ遷請シ奉ル所ナリト云。[大野 1983 276]	御堂村の宮地と呼ばれる地に祀られていたが、近くを流れる槻川が流路を変えたために現在の安戸字帯沢の地に社地を移したという。氏子は「この妙見様は秩父神社のナカツェィ（中姉）である」と言い、更に「妙見様は三姉妹で、長女は小川町木部の妙見様（三光神社）、次女は当社、三女は秩父神社である」と語っている。明治初年に社号を身形神社と改め、現在に至っている。身形の社名由来は三神を示す三形の意で、古くからあった三女神の伝承に基づくと考えられる。	身形神社	市杵島姫命、多紀理毘売命、湍津姫命の三柱。宗像三女神とされる
第5所 妙見社	都幾川村大野 (現 ときがわ町大野)	妙見ノ神社ハ大野村ノ内ニアリ、秩父七妙見ノ五所ニテ大宮町妙見神ヲ郡境ノ村々七ヶ所ニ遷請シ奉ル所ナリト云フ、此社ハ此村ノ総鎮守ニテ一村ヨリ初穂コレヲ献ジ祀リテ祠主アル事ナシ。[大野 1983 269]	日本武尊がこの地に来て国常立尊を祭り、身形神社と称したのに始まると伝えられる。江戸期になって北滝山妙見宮と改め、明治初年に身形神社に社号をもどしたが、明治四十三年には地名を採って大野神社と改めた。本殿に安置される毘沙門天像は、北方の守護神であるため、北極星を祀る妙見信仰により奉安されることになった。	大野神社	国常立神
第6所 妙見社	名栗村上名栗 (現 飯能市上名栗)	名栗村ノ内宮平ト云所ニ妙見ノ社アリ。秩父七妙見ノ六ニテ大宮町妙見神ヲ郡境ノ村々ニ遷請シ奉ルシト云。祠主山岡氏コレヲ奉ズト云。[大野 1983 265]	元暦年中（1184-85）の頃、栗林に天から「丸き光物」が降ったことから、そこに社を建て星宮神社と称したのが始まりである。応仁元（1467）年に小野少将藤房の一行が和歌修行に関東へ下り、鎌倉から信州更級方面へ向かう途中、当社に参詣し、社号の星宮が珍しいと心に留め、翌年雑掌を派遣して山城国紀伊郡伏見より大己貴命を当社に分霊して妙見宮と称せしめたという。明治3（1870）年に星宮の古称に復し、現在に至っている。	星宮神社	天御中主命、天照大御神、大己貴命の三柱
第7所 妙見社	飯能市北川	此村ノ内宮代ト云ル所妙見ノ神社アリ、是秩父七妙見ノ内ニテ、大宮町妙見神ヲ郡境ノ村々ニ遷請シ奉ル所ナリト云。[大野 1983 267]	古くは山神社と称していたが、寛文8（1668）年頃から星宮大神社と号して妙見様のお姿を安置した。このお姿は明治初年に紛失したという。明治40年の合祀を機に喜多川神社と改めた。氏子は「妙見様は三姉妹で、末の妹は秩父神社となって出世し、中の妹は我野神社となり、姉が当社になった」と語り伝えている。氏子区内の柏本地区では鶏は飼わず、また正月には門松を立てないという風習がある。これは妙見様が山棟蛇の姿で正月遊びに出たら鶏に追われ門松の松葉で目を突いて片目をつぶしたためである。	喜多川神社	天御中主神

『秩父志』（大野 1983）、「秩父妙見研究序論 外秩父の妙見を祀る社寺の検討から」（若松 2011）、「秩父七妙見社」（宮澤 1994）を基に筆者が作成した